

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	山尾 英一
2. 審査委員	主 査：兵庫教育大学・教授 森山 潤 副主査：兵庫教育大学・教授 小山英樹 委 員：上越教育大学・教授 黎 子柳 委 員：兵庫教育大学・教授 森廣浩一郎 委 員：鳴門教育大学・教授 伊藤陽介
3. 論文題目 工業高校の進路指導における生徒の職業に対する自己効力感の形成要因と役割	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 山尾英一 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時： 平成30年7月16日（祝） 10時30分～11時30分 場所： 兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室5 1. 学位論文の構成と概要 本研究の目的は、工業高校の進路指導における適切な教育的支援の実践に向けて、工業高校生の職業に対する自己効力感の構造を把握し、その形成要因と役割を明らかにすることである。本論文は緒論と結論を含め全10章で構成されている。第1章では、工業高校の現状及び自己効力感に関する先行研究を整理し、①近年、工業高校を卒業した後、職業生活を適切に営めない生徒が増えつつあること、②生徒が、将来の職業生活に対する見通しや自信、展望などをもてていないことを進路指導上の課題として指摘した。これらの課題の解決に向けて本研究では、1) 生徒の職業に対する自己効力感の構造的な把握、2) 生徒の職業に対する自己効力感の形成要因の検討、3) 生徒の職業に対する自己効力感が果たす役割の検討という3つの研究課題を設定した。 研究課題1に対しては、第2、3章において生徒の職業に対する自己効力感を把握した。その結果、生徒の職業に対する自己効力感が、①職務や職場などの社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる「適応資質効力感」、②特定の産業分野に関連する領域固有性の高い専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる「専門性効力感」の2因子(以下、職業自己効力感構成因子群)により構成されていることを明らかにした。その上で、企業の人事担当者を対象とした調査を行い、関連・非関連業種共に、これらの職業自己効力感構成因子群の水準を進路指導において高めることの妥当性を	

確認した。研究課題2に対しては、第4, 5章において職業自己効力感構成因子群の形成要因を検討した。その結果、キャリア成熟との関連性では、1学年でキャリア関心性が、2学年でキャリア計画性が、3学年でキャリア自律性が、「適応資質効力感」の形成に寄与していることを明らかにした。自己概念形成との関連性では、「自律志向性」が「専門性効力感」の形成度に、「社会的価値志向性」が「適応資質効力感」の形成度に影響することを明らかにした。研究課題3に対しては、第6, 7章において、生徒の進路実現に果たす職業自己効力感構成因子群の役割について検討した。その結果、時間的展望体験との関連性では、すべての学年において「適応資質効力感」が広範な影響力を有していること、進路不決断との関連性では、「職業決定不安」、「職業障害不安」、「職業情報不足」などの回避に職業自己効力感構成因子群の水準の高さが重要な役割を果たすことを明らかにした。しかし、「専門性効力感」は、その形成要因及び影響対象が限定的であり、専門性の形成に依拠したキャリアへの展望が将来の職業に対する自信と適切に結びつけられていない傾向を課題として指摘した。

以上の結果を踏まえ第8, 9章では、公立A工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施した。これまでに得られた知見に基づき、3学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図るように進路指導全体を構成すると共に、「専門性効力感」に留意した取り組み（進路講話、模擬面接、卒業生を囲む会など）を取り入れた。その結果、これらの取り組みが「適応資質効力感因子」、「専門性効力感因子」両因子の形成に寄与することを示した。また、卒業・就職後の追跡調査では、関連業種就職群において「適応資質効力感」が在籍時の水準を維持する共に、「専門性効力感」がさらに向上することを確認した。

2. 審査経過

本論文は、工業高校における生徒の職業に対する自己効力感に着目し、適切な進路指導のあり方について体系的・実践的に検討したものである。本論文では基礎研究として、工業高校生を対象に、約10年間にわたる調査を実施し、生徒の職業に対する自己効力感の構成因子の抽出、形成要因の同定、影響対象の検討に取り組んでいる。その結果、工業高校生の職業に対する自己効力感が「専門性効力感」と「適応資質効力感」の2因子で構成されていること、これらの自己効力感が工業高校生としての自己概念やキャリア成熟の影響を受けて形成されること、形成された自己効力感が時間的展望体験の形成に寄与し、進路不決断状態を軽減する役割を果たしていることなどを明らかにしている。その上で、本論文では、自己効力感の形成要因や影響対象の関連性を踏まえた進路指導と追跡調査を実施し、基礎研究で得られた知見の実践的な検証を試みている。このように本論文は、これまで普通科高校の生徒に関する検討が主流であった進路自己効力感の研究に対して、工業高校生を対象に実証的な知見を得ている点には、独創性と発展性がある。また、その知見を踏まえた進路指導のあり方を提案している点には有用性が認められ、今後の教育実践の発展に大きく貢献するものと期待できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は山尾英一の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。